

「西坂神社」 17世紀代を代表する 神社建築



▲西坂神社本殿

西坂神社は、香取市の西端、西坂地区に鎮座しています。面足命・大己貴命などを祭神とし、白鳳2年(673)の創建と伝えられ、現在の場所に移ったのは斉衡元年(854)とされています。

かつて坂大明神や西坂大神宮と呼ばれ、近郷の人々から深く崇敬されてきました。

本殿は、正面柱間が3間の切妻屋根を持つ建物(身舎)に庇(向拜)がついた三間流造と呼ばれる様式です。

流造とは、正面の屋根が軒先まで伸びて曲線をつくることにちなんだもので、神社建築としては一般的なものです。

身舎の間取りは奥行き2間のうち前方を外陣、後方を内陣として中央の柱間のみには扉を設け、左右は板壁、内部に間仕切りはありません。

天井は周囲を一段斜めに打ち上げた支輪天井で頭貫木鼻は唐獅子と獺の丸彫、十二支の本臺股が付けられています。

廻縁は、正面および両側面

に廻り、背面柱筋に彫刻を施した脇障子を立てています。前面には5段の階段をつけ、廻縁の周囲に高欄をつけ、階段の左右には擬宝珠を据えた登高欄をつけています。

建立当初の屋根は、茅葺でしたが昭和24年に銅板葺に改めています。

平成元・2年度に行った保存修理工事の結果、現本殿の建立は、発見された部材墨書などから元禄9年(1696)であったことが確認されています。これは、社伝の慶安元年(1648)、代官一色忠次郎が再建したとするよりは年代が下ることが明らかになりました。

この本殿は、地方の神社建築としては本格的な様式や手法が用いられ、熟練した工匠の技法が認められることから17世紀代の神社建築を代表するものとして昭和48年に県の指定を受けています。

問い合わせ

生涯学習課 ☎(50)1224